

# 近江の古墳時代、渡来文化と人々の暮らし

## 1. はじめに

ヤマトの大王を中心に各地の王たちと連携が強められた3世紀末頃から、大王を中心に律令体制<sup>りつりょうたいせい</sup>が整い始めた7世紀前半頃までを古墳時代と呼んでいます。とくに、5世紀頃、大王としての権威<sup>けんい</sup>の証<sup>あかし</sup>を中国の王朝に求め、大陸との交流が活発に行われるようになりました。その結果、大陸から多くの人々が渡来<sup>とらい</sup>し、新しい文化・技術がもたらされ、人々の暮らしや社会のあり方に大きな影響を与えることとなりました。今回はその様子を紹介することとします。

## 2. 暮らし

### (1) 住まいとカマド

人々の住まいは、縄文時代から続く「竪穴住居<sup>たてあなじゅうきょ</sup>」が主流です。近江でも4世紀末頃までには、この住居に造り付けのカマドがもたらされました。それまでの炉<sup>ろ</sup>に比べて



竪穴住居に造り付けられたカマド(伊良町下之郷遺跡)

はるかに熱効率が良く、6世紀以降またたく間に普及<sup>ふきゅう</sup>していきます。

カマドは壁際に造られるため、炉のあった中央に広い空間ができます。煙突を屋外に出すため、壁を高く造る必要ができ、住居スペースが広がります。現在の住居のように、台所・居間・寝間など、機能別に分けて使うことが可能になったのです。

食事の場と調理の場が区別されたため、現在のお茶碗<sup>すえき</sup>のような須恵器<sup>つきみ</sup>の坏身が多く使わ



カマドをもった竪穴住居(愛荘町市遺跡)



竪穴住居から出土した土器(愛荘町市遺跡)

れ、カマドの構造に合わせて長胴甕ちやうどうがめや把手とって付き甕、鍋などの煮炊き用の土師器はじきも生産されるようになりました。

住居内にカマドを取り付けられることで、人々の生活様式に大きな変化がもたらされたのです。

## (2) 渡来系の人々の住まい

旧滋賀郡や愛知郡で、建物の柱を土壁つちかべで覆う「大壁造建物」おおかべづくりたてものが見つかっています。いずれも7世紀頃の住居跡で、朝鮮半島に似たものがありますが、これまでの日本の建物になかったものです。また、朝鮮半島で見られるオンドルと呼ばれる暖房用の石組みも大津市あのういせきの穴太遺跡で見つかっています。

これらの地域は、朝鮮半島に祖型そけいのある横穴式石室よこあなしきせきしつが分布し、外来のカマド神まつを祀る



切妻大壁造建物



オンドル遺構  
(大津市穴太遺跡)

ミニチュア炊飯具すいはんぐセットが出土するなど、渡来人とらいじんとの関係が深い地域で、これらの建物は、この辺りに住んでいた渡来系の人々の住居だろうと考えられます。



ミニチュア炊飯具  
(大津市穴太飼込古墳群)

## 3. 物づくり

### (1) 鍛冶と製鉄

鉄は青銅とともに弥生時代に伝わっており、この頃に鍛冶の技術も伝わったと思われます。鉄製品やその素材は全面的に朝鮮半島に依存していました。5世紀になってその輸入量が増大すると、各地での王たちの管理のもとで、鍛冶が盛んに行われるようになります。6世紀には、日本でも中国地方の一角で鉄の生産が開始されます。鉄生産が本格化するに伴い大和政権による鍛冶工人こうじんの専業化せんぎょうかが一層進み、鍛冶技術が広く各集落にまで行き渡るようになりました。

近江では、彦根市芝原遺跡しばはらいせきで4世紀の竪穴住居内に造られた鍛冶工房が見つかっています。鍛冶は弥生時代から行われますが、工房



鍛冶工房 (彦根市芝原遺跡)

跡としてわかる遺跡の中でも古いものです。

製鉄は、木之本町古橋遺跡<sup>ふるはしせいせき</sup>で6世紀末頃のものが見つっていますが、琵琶湖周辺は古くから鉄鉱石などの鉄資源が豊富な地域として注目され、大津市から高島市にかけての広い範囲に製鉄遺跡が分布しています。

## (2) 農工具の発達<sup>のうこうぐ</sup>

鉄は、5世紀頃に広く普及し、これまでの木製の鍬や鋤にも鉄製の刃をはめ込むものが用いられるようになりました。これまでの土壌の軟質<sup>でいしつち</sup>な泥湿地だけではなく、木製農具で



鉄製鍬先

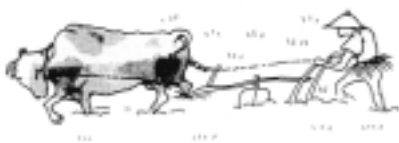
は難しかった水がかりの悪い扇状地<sup>せんじょうち</sup>などでのかんがい工事を可能にしたのです。農耕地の開発に大いに貢献することになりました。

(高島市薬師堂遺跡) 滋賀県東近江市の堂田遺跡<sup>どうだいせき</sup>で5世紀後半、

石田遺跡<sup>いしだいせき</sup>では4世紀後半の木製馬鍬<sup>まぐわ</sup>が出土しています。馬鍬はウシやウマに引かせて耕土を起す道具で、近江には、畜力<sup>ちくりょく</sup>を利用した新しい農耕法が、全国的に見ても早い時期に、大陸から伝来しているのです。



堂田遺跡から出土した馬鍬



馬鍬を使用した農耕の様子

また、手斧<sup>ちょうな</sup>やノミ、タガネなどの鉄製工具の普及は、多様な木工<sup>もっこう</sup>や金工<sup>きんこう</sup>の発達<sup>うなが</sup>を促しました。

## (3) 須恵器

5世紀の初め、「須恵器<sup>すえき</sup>」と呼ぶ新しい土器を焼く技術が朝鮮半島から伝わり、大阪府南部陶邑窯跡群<sup>すえむらようせきぐん</sup>でその生産が開始されました。須恵器は、轆轤<sup>ろくろ</sup>を用いて成形され、登窯<sup>のぼりがま</sup>を用いて摂氏1000度を超す高温<sup>かた</sup>で堅く焼きしめられた土器です。この技術は、それまでからあった壺<sup>つぼ</sup>・甕<sup>かめ</sup>・高坏<sup>たかつき</sup>などに加えて、瓶<sup>へい</sup>やハソウといった新しい器形、装飾を付けた特殊な器形など、土師器にはなかったバラエティーに富んだ製品の生産を可能にしました。また、登窯は、一度にたくさんの土器が焼けるため大量生産が可能になり、多くの需要に対応できるだけの専業体制の整備も可能になったのです。



さまざまな形の須恵器 (多賀町檜崎古墳群)

近江での須恵器の生産は、5世紀末ころ甲賀市<sup>いずみこようあと</sup>の泉古窯跡<sup>いづみこやうあと</sup>や野洲市夕日ヶ丘遺跡<sup>ゆうひがおいせき</sup>ではじまります。これらは短期間で操業が中止されますが、6世紀代になると各地に築窯が行われはじめます。とくに、6世紀後半頃には、野洲市から竜王町にまたがる鏡山丘陵一帯にかがみやまこようあとぐん<sup>かがみやまこようあとぐん</sup>鏡山古窯跡群<sup>かがみやまこやうあとぐん</sup>が形成されます。県下最大規模

の窯跡群で、8世紀頃まで操業を続けていました。さらに、6世紀末から7世紀代には各郡ごとに一ヶ所程度まで須恵器窯が設けられるようになり、周辺地域への供給体制が整えられました。

#### 4. 葬送の風習

6世紀の初め、近江にも朝鮮半島から横穴式石室という新しい埋葬施設が導入されます。ここに葬られる王たちの様子も大陸の風習が取り入れられ、金銅製の冠・履・耳飾りなど、華麗な品々を身につけるようになります。金銅製品は青銅に金を張ったもので、鍍金の技術や金銅を鉄地に張り付ける技術、金属などに線刻し金や銀をはめ込む象嵌の技術なども大陸から伝わりました。また、食器類や甕、高杯、瓶などの日常容器類も副葬され、彼岸に生前と同じような生活が行えるようにしようとする中国的な観念ももたらされています。6世紀後半から7世紀初頭、各地で群集墳が形成されるようになり、こうした葬送儀礼も一般化していきました。



6世紀の王の姿  
(高島市鴨稻荷山  
古墳(復元模型))



横穴式石室



金環



古墳出土の日常容器類  
(大津市大通寺古墳群)

#### 5. おわりに

古墳時代は、鉄器の普及、かんがい技術の発達などにより耕地が拡大され、生産性が飛躍的に増大した時代でした。このことを基盤に各地の王たちは巨大な古墳を象徴的に築き、地域支配を強めていきます。その一方で、一般の人々の暮らしも大きく変化し、豊かさを増していきました。このこと背景には、中国大陸や朝鮮半島の諸王朝との活発な交渉に伴う大陸からの先進的な諸技術や諸制度・思想の導入があったのです。

滋賀県埋蔵文化財センター  
〒520-2122  
滋賀県大津市瀬田南大菅町1732-2  
電話 (077) 548-9681  
FAX (077) 548-9682  
E-mail shigamabun-center@qutar.ocn.ne.jp